

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 26 日現在

機関番号：32506

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26502013

研究課題名(和文) 異文化ケアのコミュニケーションと異文化適応

研究課題名(英文) Intercultural Communication and Cross-cultural Adaptation in Intercultural Care Settings

研究代表者

高本 香織 (Takamoto, Kaori)

麗澤大学・外国語学部・准教授

研究者番号：30550264

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：国内外のフィリピン人看護師の聞き取り調査と文献調査から主に以下のことがわかった。外国人ケアワーカーの異文化適応におけるコミュニケーションの問題には、看護の実践とコミュニケーションスタイルの文化的相違が影響していた。適応に必要な文化・社会的スキルは日常的なコミュニケーションを通してインフォーマルに学んでいた。もともと民族的・言語的に文化的多様性の高いフィリピン人看護師にとっては、そこがどこの国かよりも、適応すべき環境が文化的に多様であるかどうかのほうがより重要であった。現地の文化や看護実践の方法を受け入れつつも同化するのではなく、フィリピン流の素晴らしいケアを提供したいという意識がみられた。

研究成果の概要(英文)：Cultural differences in nursing practices and in communication styles affected the process of cross-cultural adaptation experienced by foreign health care workers. They learned socio-cultural skills rather informally through communication with both their international colleagues and the colleagues of the host culture. For Filipino nurses who are already multicultural with significant experiences in ethnically and linguistically multicultural environments in the Philippines, what matters is not to which country they moved, but rather the level of cultural diversity of the environment to which they are adapting. It is easier for them to adapt to a culturally diverse environment than a less diverse environment. Although Filipino nurses learn the host culture's nursing practices, they believe that the quality of their nursing care is very high and they want to provide their Filipino way of nursing care to the patients, rather than completely assimilating themselves into the host culture.

研究分野：異文化コミュニケーション

キーワード：異文化ケア 異文化コミュニケーション 異文化適応

1. 研究開始当初の背景

(1)背景:平成20年から日本でも経済連携協定(EPA)に基づき医療・福祉の分野において外国人労働者の受け入れが始まった。外国人看護師・介護福祉士に対する社会的関心が高まる中、いわゆる「言語・文化の障壁」に対する懸念がメディアで取り上げられるようになった。高度な対人コミュニケーション能力が要求される看護・介護の現場において、日本の言葉・文化・慣習・価値観に馴染みのない外国人が質の高いケアを提供できるのだろうか、と異文化間ケアの現場でのスキルを疑問視する声が上がっていたのである。社会的な関心の高まりを受け、異文化間ケアの問題に関する学術的関心も高まり、看護、介護、社会学、コミュニケーション学など多様な分野において、受け入れ施設や来日した外国人ケアワーカーを対象とした研究が学際的に行われ始めた。

(2)動機:看護・介護の現場で働く外国人をめぐる問題に関して学際的なアプローチで様々な研究が行われ、国家試験の改善点、受け入れ施設の負担、受け入れた人材の定着率の低さなど、EPA制度特有の問題点が浮き彫りとなってきた。その一方で、異文化間ケアの現場における外国人ケアワーカーの対人的なコミュニケーションと異文化適応の問題に焦点を当てたものはまだ少なかった。

2. 研究の目的

そこで、本研究では、異文化間ケアの現場における外国人ケアワーカーのコミュニケーションと異文化適応(=言語・文化・慣習・価値観等を学び実践できるようになる過程)の問題に焦点を当てた。国内の外国人ケアワーカーに限定せず、異文化間ケア先進国であるアメリカを中心に海外の事例・文献を調査することで、国内の外国人ケアワーカーの問題に国際的な視点を加えることも目的とした。

3. 研究の方法

国内外の先行研究の調査、国内外の外国人(フィリピン人)看護師の聞き取りデータの分析(現象学的分析)を中心に、米国の外国人看護師を受け入れている病院の病院関係者側からの聞き取りや、海外勤務経験のある日本人看護師の事例の報告なども含め、国境を超えて地球規模で移動する外国人看護師たちのコミュニケーションと異文化適応に関わる経験・問題について、多角的に調査を行った。

4. 研究成果

(1)研究の主な成果:日本で働く外国人ケアワーカー(EPAで来日したフィリピン人看護師)からの聞き取りデータの現象学的分析により明らかとなったのは、異文化適応のプロセスにおけるコミュニケーションの主な問

題は、文化の相違に関するものではなく、言語と自己アイデンティティの変化に関するものであるということである。日本語能力が不十分なことから、それまでの優秀な看護師としてのアイデンティティを失ってしまったフィリピン人看護師たちは、周囲の人々とのコミュニケーションを通じて、日々新たなアイデンティティを協働的に構築していなくてはならない状況にある。他者とのコミュニケーションによって過去の優秀だった自分と現在の自分との比較を強く意識せざるを得ない時に、そのコミュニケーションの経験は「問題」として意味づけされる。さらに、周囲の人々が自己イメージの回復を阻害したり助けられなかったりした時も、そのコミュニケーションは「問題」として認識されるのである。

しかし、長期に渡って外国人看護師を受け入れているアメリカ中西部の病院の関係者からの聞き取りによると、外国人看護師の日常の業務においては、言語よりも文化の問題のほうがより顕著であり、看護師の役割は患者の文化を含めて患者をまるごとケアすることであるとの見解を示していた。また、米国で働いているフィリピン人看護師(もともと英語でコミュニケーションが取れるため、渡米直後から言語の問題がない)の聞き取りからも、コミュニケーションの主な問題は言語の違いによるものではなく、文化的な相違によるものであるということがわかった。つまり、日本で働く外国人ケアワーカーの場合は日本滞在歴がまだ短いため、適応初期は言語習得に意識が集中してしまい、言語によるコミュニケーションの根幹にある文化的コンテキストに関わる問題は、まだ陰に隠れて意識されていないのではないだろうか。

アメリカを中心とした日本国外の外国人看護師に関する先行研究の調査においても、言語以外の文化的な相違に関する共通課題が明らかとなった。その例として、まず、看護の実践に関する文化的相違があげられる。例えば、母国では、入院患者には家族が付き添うことが当たり前であるのに、受け入れ先の文化では付き添いがなく、患者の身の回りの世話が看護師の仕事の中心となっていたり、看護助手と看護師の仕事の範囲が違っていたりする。このような看護の実践に関する文化的な違いが、外国人看護師たちを混乱させる原因となっている。

次に、コミュニケーションスタイルの文化的相違がある。何か問題があったときに、言葉で直接的に説明をし、解決策を議論することを求められる文化と(direct, low-context)、言葉には出さずに個人の行動で解決することが美德とされるような文化(indirect, high-context)とでは、看護師が実際に問題が起きた時に対処する方法に違いが出る。それをお互いに自分の文化的規範の枠組みで解釈することで、誤解が生まれる可能性がある。例えば、何かミスや失敗が起

きた時に、周囲と情報を共有せず自分一人で行動し対処してしまった場合、前者ではその行動は「問題を隠した、秘密にした」と否定的に捉えられるのに対し、後者では逆に美德として捉えられる可能性がある。また、個人主義的価値観(individualism-collectivism)や人間関係における上下関係に対する価値観(power distance)の相違から、相手の主張を自己中心的と否定的に捉えたり、逆に自己主張をしないことを否定的に捉えたり、上司や部下といった上下関係において効果的なコミュニケーションが取れずに困ったりすることがある。これらに関しては特に「アサーティブネス(assertiveness)」という概念がキーワードとして注目される。例えば、個人主義的傾向の強い西洋文化圏(ヨーロッパ、アメリカ、オーストラリアなど)で働くアジア人看護師は、このアサーティブネスを身につけることの重要性を示唆していた。(逆に、日本で働くフィリピン人看護師の聞き取りでは、日本ではアサーティブな態度は逆に不適切であると感じており、例えば、ドクターに間違いを指摘したり自分の意見を述べたりするべきでは無いと感じていた。)このように、外国人看護師とその受け入れ先の文化的価値観の相違が日常のコミュニケーションの問題に関わっていることがわかった。

国外の外国人看護師の適応の事例から、言語の習得が進み、言葉の壁を乗り越えると、文化的なスキルがより重要になることが明らかになったが、それでは、受け入れ側はどのように外国人ケアワーカーの文化的なスキルの向上を支援したら良いのだろうか。「文化-社会的スキル(Socio-Cultural Skills)」に関してはフォーマルな教育(=ワークショップなどによるトレーニング)が行われることもあるが、むしろ、外国人看護師は日常的なコミュニケーションからインフォーマルな形で多くのことを学習しているという研究報告がある。多くの先行研究によっても、問題に直面した時には、同じ外国人看護師同士のサポートだけでなく、受け入れ国の看護師たちからのサポートも重要であることが示されている。

次に、長期にわたる異文化適応のプロセスに関して、在米フィリピン人看護師の聞き取りデータの現象学的分析から、主に以下の2点が明らかになった。まず、もともと文化的多様性の高いフィリピン人看護師にとって、多様性の高い環境(例:ニューヨーク)には適応しやすく、多様性の低い環境(例:アメリカ中西部の小都市)では適応に困難を伴っていたことがわかった。つまり、フィリピン人看護師が異文化に適応していく上では、そこがどこの国かということではなく、適応すべき環境が文化的に多様であるかどうかの問題だったのである。また、フィリピン人看護師は、フィリピン流の看護ケアは世界のどこでも受け入れられると自負しており、現地

流の実践を学びつつも完全に同化しようという意識はみられなかった。

これに対して、受け入れ国である日本は、外国人ケアワーカーの日本文化への同化を前提として「言語や文化の障壁」や「コミュニケーションの問題」を議論してきたのではないだろうか。文化的多様性の低い環境の日本で、同化を強制しないやり方で、どのように外国人看護師を支援していくかを議論することが今後の課題といえるのではないだろうか。

(2)国内外における位置づけとインパクト: 国内の外国人ケアワーカーのコミュニケーションと異文化適応の問題について、異文化ケア先進国であるアメリカを中心とした海外の状況を調査し、視野を広げ、地球規模の大きな枠組みの中で日本の異文化間ケアという現象を捉えることができた。国境を超えて移動する外国人看護師の研究に、日本からの視点を追加することができた。

(3)今後の展望:すでに述べたように、文化的多様性の低い日本で、外国人ケアワーカーたちに同化を強要せずに、効果的な支援をする方法を模索することが、今後の一番の課題と言えるのではないだろうか。外国人ケアワーカーが受け入れ国の文化や医療システムに適応することが当然と思われている一方で、実際には受け入れ側も外国人ケアワーカーとのコミュニケーションに適応することが求められているのである。今後の研究では、まず、異文化間ケアの現場で求められる日本特有の文化的価値観に基づく文化・社会的スキルを明らかにしなくてはならない。そして、外国人ケアワーカーがそれらのスキルをインフォーマルに学ぶことを助け、さらに自己アイデンティティの回復と再構築を支援できるようなコミュニケーション環境を整える必要がある。それには異文化間ケアの現場での受け入れ側のコミュニケーションに対する意識改革と新たなルール作りが必要であろう。コミュニケーション学的視点で得られた知見が日本における異文化間ケアの定着に貢献できることを期待する。

EPAで来日した看護師・介護福祉士候補者たちは、母国では看護師の資格を所有している。その意味では彼女・彼らは看護師である。しかし、来日時点では日本の看護師資格をもっていないため、正式に国内で看護師(もしくは介護福祉士)として働けるようになるのは国家資格を取得してからである。(つまり看護師候補者はあくまでも「候補者」であり、日本では看護師としての仕事に従事しているわけではない。)そのため、本研究ではケア労働に携わる外国人の総称として「外国人ケアワーカー」という言葉を使っている。英語のcare workerの和訳として「介護士」という言葉が使われているのを見かけるが、

「ケアワーカー」は本研究においては介護士のみを指すものではない。「ケア学」においては、「ケア」という概念は特定の分野に限定されておらず、医療、看護、介護、福祉、心理、教育、倫理、哲学など様々な領域に跨る概念として捉えられている。本研究においても、「ケア」は「ケア学」における「ケア」であり、「介護」に限定しているわけでも「看護」に限定しているわけでもない。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

高本 香織、外国人看護師の異文化適応：アメリカを中心に海外の事例から、言語と文明、査読無し、Vol.13、2015、pp.29-45、DOI: <http://doi.org/10.18901/00000579>

〔学会発表〕(計3件)

高本 香織、在米フィリピン人看護師の異文化適応経験、The Society for Intercultural Education, Training, and Research, Japan (異文化コミュニケーション学会)、2016年9月18日、名古屋外国語大学

高本 香織、外国人看護師の異文化適応：海外の事例から、The Society for Intercultural Education, Training, and Research, Japan (異文化コミュニケーション学会)、2015年9月20日、桜美林大学

高本 香織、異文化間ケアのコミュニケーション：開かれたケアの現場を目指して、The Society for Intercultural Education, Training, and Research, Japan (異文化コミュニケーション学会)、2014年9月27日、上智大学

6. 研究組織

(1)研究代表者

高本 香織 (TAKAMOTO, Kaori)

麗澤大学・外国語学部・准教授

研究者番号：30550264